

論文

「授業を見る目」の育成

生野金三・内山須美子

An Attempt at Practical Teacher Training Through
the Observation and Evaluation of “mock classes”

SHONO Kinzo, UCHIYAMA Sumiko

In this research, the target was set at growing the essential ability required for the teaching staff, particularly the fundamental capability of exercising practical leadership. Specifically, the research was designed to examine how the viewing power of students, who took lectures, was enhanced through the imitation lectures under the teaching subject: “Expression for Exercise.” As a result of study and consideration, “content of exercise,” “flow of practice,” “environmental composition,” “question-asking plan,” and “giving thought to safety” were mentioned as important viewpoints with regard to “lecture-planning capability.” Concerning “lecture exercising potential,” on the other hand, “techniques for addressing students,” “flexibly dealing with problems,” “consideration/care to ensure safety,” “watching the state of children,” and “attitude of teachers” were pointed out as important viewpoints.

I はじめに

教育職員養成審議会の第1次答申は、教職課程の教育内容について、国際化・情報化の進展やいじめ・登校拒否等学校をめぐる課題への対応という社会的要請と教育内容の実態との乖離、学問分野の専門性の過度の重視と教科指導をはじめとする教職の専門性の軽視、授業科目の名称に相応しい包括的・体系的な教育の欠如等、不十分な教育内容、方法等を問題点として掲げている。このようなことを踏まえ、教育職員養成審議会は、「教員に求められる資質能力と教職課程の役割」の項において、

これからの教育には、変化の激しい時代にあって、子どもたちに「生きる力」を育む教育を授けることが期待される。⁽¹⁾

とし、そしてこのような観点より、今後の特に教育に求められる具体例を三者にわたって掲げている。その中の一つに、未来に生きる子供達を育てる教員には、「実践的指導力につながる資質能力」が求められるとしている。それは「教育内容を改善するための基本的視点」の項に掲げられている。「実践的指導力につながる資質能力」をめぐっては、

教職課程におけるそれらの授業科目等の内容・方法の根本的な充実を図ることが急務である。その際、大学で教授される学問的な方法論をもとに、授業の実践に活用できるだけの資質能力を育てる視点が特に重要である。⁽²⁾

とし、そしてその基礎を強固にするに当たっては、授業方法についても、過度に講義中心であるなど十分に工夫されているとはいえない。教職課程において、各大学・教員は、より具体的・実践的で理解しやすく、教員を志願する者の興味を喚起する授業方法を工夫する必要がある⁽³⁾と指摘している。これらは、教科等の指導を適切に行うための実践的指導力の基礎を育成する観点より掲げられた内容である。何はさて置き、ここでは大学の教育課程の授業科目において、教員を志願する者の課題解決能力を育成（実践的指導力の一端）する観点より事例研究、討議学習等の方法を積極

的⁴⁾に導入し、受講者である学生に対してより具体的・実践的で分かり易い授業方法を工夫する必要性を強調している。言ってみれば、大学の教職課程の授業内容においては、教育内容を発達段階に応じてどのように教授するかについて教員を志願する者たちに考えさせるような授業、また学び方が分かる効果的な教育方法を導入した授業等と将来実践の場で活かせるような実践的指導力の基礎を育成することを強調している。

上記のことを踏まえ、本研究では、教員に求められている資質能力、とりわけ実践的指導力の基礎の育成を志向し、教職科目「運動表現」の模擬授業を通して、受講者である学生の「授業を見る目」はどのように育成されたかを探ることを目的とする。

II 「運動遊び」模擬授業の基本的な考え方

1 模擬授業の基本的な考え方

模擬授業では、受講者である学生を幼児に見立てて授業を行うことにした。学生は普段学んでいる仲間を相手にして授業を行うことになる。授業設計の段階（学習指導案の作成に当たって、「教材の研究」「指導の研究」等について解説を加える。）で指導者としてのあり様を学んでいるので、実際の授業の場では、それぞれのおかれた立場を認識しながら授業に参加することになる。そして、授業は自分の教材解釈が学習者に受け入れられたか否か確認でき、一方学習者はいかに対応の仕方（対処）が授業者にとって重要であるか否かを確認できる。このようなことが豊かな授業理解、「授業を見る目」の育成にも繋がっていくと考える。

大学生になって、学生はこれまで保育に関する科目「運動表現」（必修科目）の授業において模擬授業を体験（5名を1グループとして10グループを形成）し、各グループの代表者1名が30分で模擬授業を行う計画を立て、そしてその実施に向け各グループ同時進行で作業を行い、まずは指導案を各グループで作成し、そしてそれを検討し、修正し、それにしたがっ

て模擬授業を行うための諸準備を行い、その実践を試みている。今回の「運動表現」では前回の模擬授業の体験を踏まえ、その模擬授業の運営をめぐっては、全員が余裕を持って授業の準備、授業が行えるように配慮した。今回の「運動表現」も必修科目であり、全体で合計130名（3クラス体制）の学生が受講した。130名の学生が全員授業を行うのは無理であるので、模擬授業は各グループの代表者1名（3クラス）が行うようにした。模擬授業に向けては、まずは個々人あるいはグループで同時進行で作業を行い、指導案を作成し、提出する（添削し返却する）。次いで、授業者は指導案に対する指摘を基に、再度指導案を作成し、それにしたがって模擬授業を行うための諸準備を行う。その間、就中本時案の「環境構成」「教師の働きかけ」「予想される子供の反応」、発問計画、作業のプリント等については個々に指導を行う。

2 「運動表現」における授業設計と実践力

授業者は、常に質の高い授業を志向して授業を計画し、実践するよう心掛けることが重要である。その授業の質であるが、それは授業を受ける幼児の質（立場）に依存していることは言うまでもないが、幼児の質の違いにどれだけ対応した授業であるかということが授業の質を決定するという意味では、結局授業の質は授業者の質によると言わざるを得ない。その授業の質は、浅く貧しい授業から深く豊かな授業まで多種多様である。教職科目「運動表現」では、授業に関して受講生である学生の豊かな理解を促し、授業者としての質を高めること等を目指し、授業を見る視点として「授業を受ける幼児（学習者）の立場」「授業を行う保育士（指導者）の立場」「授業を参観する第三者（観察者）の立場」の三者を設定した。

① 授業を受ける幼児（学習者）の立場

これは、主に模擬授業を幼児の立場で受けるという体験を通して授業の見方や考え方を捉えようとする立場である。導入時の本時の学習課題を確認する場面、そしてそれに従って学習活動を行い、課題を解決する場面、

更に本時の学習を整理し、次時の学習を確認する場面等を学習者として体験的に学ぶことによって、それぞれの活動過程における指導のあり様についての見方や考え方を捉えることができよう。

② 授業を行う保育士（指導者）の立場

これは、授業設計（教材の研究、指導の研究）から授業の実際までを自ら保育士として体験を経ることによって授業の見方や考え方を構築しようする立場である。以下に「運動表現」の模擬授業で授業の設計から授業の実実施直前までの過程についてどのような内容を取扱ったか、その概要を述べる。

ここでは、授業設計のあり様を教材の研究、指導の研究等の面から解説を行い、と同時に授業の実際についての様相を教材「運動遊び」によって具体的に解説を行った。以下に授業設計の中の「指導の研究」の例を掲げる。

ア 指導の研究

教材の研究は、現場の研究としては、総て指導の研究を視野に入れた言わば基礎作業であるといつてよいであろう。この指導の研究については、まず指導案（本時案）を配布し、そしてそれにしたがって学習指導を展開する際、予め準備しておく必要があると考える発問事項（計画）等を提示しながら、指導案（本時案）の作成のポイントを解説した。以下、その解説に用いた指導案（本時案）を掲げる。

[指導案]

<対象年齢>

5歳

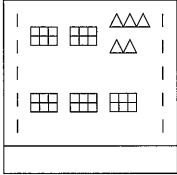
<ねらい>

- ・できた喜びを味わう。
- ・友だちと一緒に体を動かし、夢中になる。

<準備するもの>

笛、色画用紙（5枚）、カラーコーン（5色）、マット（5枚）、ビニールテープ、ハンドタオル（忘れた子用に）、MD（線路は続くよどこまでも、いい湯だな）

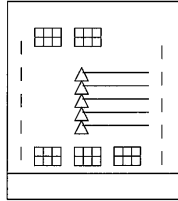
<活動内容>

過程	指導内容	環境構成	教師の働きかけ	予想される子供の反応
導入 (7分)	・活動の仕方		<ul style="list-style-type: none"> ・いつもタオルをどのように使うか問う。 ・教師は頭にタオルをのせ、子供から温泉という言葉を引き出せるように問う。 ・今日はこれから温泉に行くことを伝確認する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・「体をふく」「手をふく」などと答える。 ・「温泉」と言う。 ・本時の学習のねらいを把握する。
展開 I (4分)	・ふれあいジャンプの仕方	<ul style="list-style-type: none"> ・「線路は続くよどこまでも」を流す。 	<ul style="list-style-type: none"> ・4人組みになるようにさせる。 ・一人前に出させ、見本を見せながら説明をする。 [内容] ・タオルを足の間にはさみ、手をつないで丸くなり、そして曲に合わせて左右前後にジャンプするようにさせる。 ・広がってもぶつからないようにさせる。 ・間奏になったら近くにいるグループと8人組みになるようにさせる。2番は8人組みで同じことをさせる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・余る子供がいる場合は、ばらばらになり他のグループに入る。 ・興味をもってふれあいジャンプを行う。

展開Ⅱ（9分）

- ・しゅっぽっぽりレーの仕方

- ・カラーコーンを用意する。



- ・8人で電車になってカラーコーンの後ろに並ぶようにさせる。後半の子どもを前に呼び2列ずつになるようにさせる。
- ・1番端の列のグループを立たせ見本を見せながら説明する。

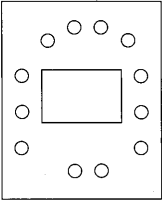
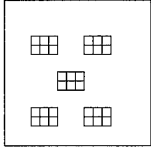
[内容]

- ・向かい合って2列で2人組になり、両手でタオルを持たせる。後ろのペアは立ち、前にいる子供たちの頭をタオルでくぐらせ、一番前に来て肩をくっつけさせる。その時、「しゅしゅっぽっぽ」と唱えながら動くようにさせる。これを繰り返し、壁まで行き、着いたらタオルをあげるようにさせる。
- ・各グループの前に貼ってある模造紙のところまで行くようにさせる。
- ・始めるように指示する。
- ・順位を発表する。
- ・もう一度壁のところまで行くことを確認し、作戦を練る時間をとらせる。上手にできたグループの様子を皆に紹介する。
- ・始めるように指示する。
- ・応援の言葉を掛ける。
- ・順位を発表する。

- ・すばやい動作で動くことよいに気付くようになる。

- ・タオルを落とす。

展開Ⅲ（8分）

<p>・温泉の入り方</p>	 <p>・マットをセットする。 ・「いい湯だな」を流す。</p>  <p>・ずれたマットがあれば直す。</p>	<p>・真ん中にマットを運びマットの周りに円になって座るようにさせる。 ・説明をする。 [内容] ・音楽がかかっている間、タオルを頭に乗せたまま歩き、音楽が止まったら赤いテープで囲った枠の中（温泉）に入ることを確認させる。入れなかった人は教師の真似をして体を洗うようにさせる。 ・広がるように指示する。 ・始めるように指示する。 ・温泉に入ったところで音楽を止める。 ・温泉に入れなかった子供には「次は入れるようにがんばろう。」と声をかける。 ・3回行うように指示する。 ・一回も洗わなかった人、温泉に入れなかった人がいないかを確認し、全体で体を洗い、全員で温泉に入るように指示する。 ・中央のマットに周りに全員集まるように指示する。</p>	<p>・音楽に合わせて動きができる。</p> <p>・「ばばんばん…」の歌詞のところで踊っている。</p>
<p>整理（2分） ・活動の振り返り方</p>		<p>・タオルで水着を作って見せ、「次は海に遊びに行こう。」と説明する。</p>	

<解説>

(1)「ねらい」について……ここでは、授業を行うに当たって、どんな子供に育て欲しいか、また子供に何を身に付けさせたいかといった目標を掲げる。その際、幼稚園教育要領や保育所保育指針等に掲げられている「ねらい」や「内容」等を踏まえ、そして幼児の姿、環境構成に鑑みて幼児に体得させることを掲げる。文末は「～できる。」「～する。」等の表現にする。

(2)「準備するもの」について……ねらいを達成するために必要な教材や教具等の資料を具体的に掲げる。

(3)「活動内容」について……表の形式で、本時の学習の全体像がより明確に分かるように述べる。「過程」は、学習の流れをめやすとして記す部分である。最も基本的な流れとしては「導入・展開・終末（整理・まとめ等）」で示される。より具体的に「つかむ・調べる・深める・まとめる」等と書き込んでもよい。「時間」は、活動の節目に入れる。「指導内容」「環境構成」「教師の働きかけ」「予想される子供の反応」の部分では、ねらいに迫るための順序を過程に沿って、それぞれの観点より幼児の活動を視野に入れながら述べる。「指導内容」の部分では、ねらいを達成させるために、どんな内容について理解させるかを明確にし、それを述べる。「環境構成」の部分では、ねらいを達成するためにどんな環境を用意したらよいかについて述べる。また、「教師の働きかけ」の部分では、活動の展開に沿ってねらいが達成されるために保育士がどうすればよいか、その援助等について述べる。更に、「予想される子供の反応」の部分では、用意された環境で幼児がどんな活動を展開するかを予想して述べる。この「活動内容」については、「時間」「環境構成」「予想される子供の活動」「指導・助言上のポイント」等の項目で述べる場合もある。

この「本時案」についての解説を基に実際の授業を行うに当たっては、主たる発言・発問計画（具体例を提示して）を考えたり、そして板書計画を立てたり、更に幼児の活動を支援する作業のプリントを作成したりして

おく必要がある。授業は保育士の発問を中核にして展開され、特に保育士の発問が活動の成否を決める鍵であると言われている。授業における保育士の発言の仕方は、一つ教育技術として重要視されている。次の板書であるが、それは教育機器の発達した現在においても、教室で行われる授業においては極めて重要な視覚メディアである。例えば、発言や発問の要点を学習の流れにしたがって板書することで、活動の道筋が記録され、またそれは授業の整理の段階で活動を振り返り、重要事項を確認することにも役立つのである。今一つの作業のプリントであるが、それは個々人の活動を意識的に行わせ、そして個に応じてその能力を発揮させるものである。又幼児がまとめた作業のプリントは、その後の授業の場で個々の学習を全体の交流の場に生かし、相互啓発し合うものとなる。この作業のプリントは保育士にとっても活動を展開していく上でとても有効な資料となり得る。保育士が作業のプリントによって個々の活動の実態を把握することができれば、それは個別指導や次の活動の方向や手順を考察する際の重要な資料となり得るからである。

指導案（本時案）の「ねらい」「準備」「活動内容」等の内容について解説を行い、そして実際の授業に当たっては発言や発問を検討しておくこと、板書計画を立てておくこと、作業のプリントを作成しておくこと等について触れた。斯様なことによって受講生である学生は、実際の授業を行う際には指導の研究を綿密にしておくことの必要性に気付くであろう。

③ 授業を参観する第三者（観察者）の立場

これは、授業の観察記録を取り、その記録を手掛かりに活動の構造や具体的な指導法に対する見方や考え方を学び取り、個々の保育の改善に結び付けようとする立場である。

Ⅲ 「授業を見る目」の育成の試み

－まとめにかえて－

受講者である学生は「授業を受ける幼児の立場」「授業を行う保育士の立場」「授業を参観する第三者の立場」等の三者を運動表現の模擬授業を行うまでの過程においてそれぞれ体験してきた。これらのことによって受講者である学生の授業を見る目はいかに育成されたか、以下にその様相を見てみる、(受講生のレポートより抜粋)

1 保育者がどのような声掛けを行うかによって、子どもの動きや楽しみ方が変化する。声掛けでも、単なる指示や説明だけでなく、子どもを勇気付ける言葉や応援する言葉等によって、子どもの動きが積極的になったり活発になったりすることがわかった。事前の発問計画も重要である。また、人数やその季節などを考慮して、何を狙いとして、どのような内容で進めていくかを計画し、考えられる子どもの動きを予想し、授業の一連の流れを事前にイメージしておくことも重要であることがわかった。しかし、計画通りには進まないことも、思いもよらないことも起きる。そのようなことに遭遇した時に、どのように対応をするかで、その後の活動が違ってくると感じた。(受講者S.F.: 授業を参観する第三者の立場)

2 自分が主体的に動いているのは夢中になっている時だった。例えばレーの競争は、勝ちたいという気持ちになって思いっきり動いて夢中になった。夢中になると、終わったあとに満足感を得られることがわかった。幼児の立場になってみて、自分達でも少し難しいと感じることは、幼児には難しすぎると思った。最初は簡単な遊びを入れて、できたらもう少し難しいものにしていくというような配慮が必要だと思った。怪我をしたら楽しい遊びも台無しになってしまうので、安全な遊びにすると良いと思う。走り過ぎないようにコーンを置いたり、勢いがつきすぎる時はスペースを広

くするとよい。また、教師の説明が長すぎたり難しすぎたりすると幼児には伝わりにくいので、簡単にわかりやすく説明したい。さらに、活動している時に幼児は誉められると、より頑張ろうという気持ちになることにも気付いた。立場を決めて経験することによって、いろいろ気付くことがあった。(受講者K.O.: 授業を受ける幼児の立場)

3 幼児のあらゆる行動を予測し、事故や怪我を未然に防ぐように声掛けや環境構成を行う。幼児の集中力を保つためにも、簡単にわかりやすく説明する。この際、幼児のやりたいという興味を引き出すような声掛けも大切である。幼児がうまくできたら誉めて自信をもつようにし、そしてうまくできないようであれば励ましたりヒントを与えたりする。幼児に遊びの説明をする際や話をする際、授業者は立つ位置を考える必要がある。めりはりのある声出しは重要である。遊びは幼児の発達や興味にあったものであったか、また幼児の満足感を得られるものであったかなど幼児の立場になって考えることが重要である。実践から、以上のようなことを学びました。(受講者S.K.: 授業を行う保育士の立場)

4 勝った時と負けた時とでとても表情が変わることがわかった。勝った方はすごく楽しそうな顔をしていた。負けた方は下を向きつまらなそうな顔をしていた。勝負をして活動をそれで終わりにするのではなく、負けたほうにリベンジさせたり、勝つための練習をさせたりするべきであると思った。子どもは夢中になっているときほど周りが見えず、衝突がおきやすいことが第三者の立場で見るとわかる。授業内で集中させたいときにはサブライズや手品などが有効と知った。第三者の立場で見るとは大切である。(受講者J.O.: 授業を参観する第三者の立場)

5 長い列を作ってしまうと子どもは前がどうなっているかがわからない。短い列にして、全員の子どもが前後左右見えるように並ばせることで、子

どもはその活動に対して興味や関心を示すと思う。勝った時、負けた時の子どもの気持ちは全然違う。授業は、総べての子どもが満足して終わるように工夫する必要があるが、競争をして負けたとしてもその頑張りの様子を誉めたり、また全員が勝てるような工夫をすることを友達同士で話し合いをさせたりするべきであると思う。真ん中に教師が立つと、教師の背後にいる子どもは教師の声が聞こえない。また、教師に見てもらえないことで仲間はずれのように感じるかもしれない。そのため、教師は立つ位置に気を付けて、全員に声が届くようにするべきだと思った。全体に掛ける声だけでなく、個別にかける声で、子どもは「私を見てくれていたんだな。」という満足感を得ることが分かった。特に誉められると意欲が増すように思う。子どもと同じ方に教師が向いていると子どもも自然と教師の話をおこうと思うようになる。しかし、教師が道具を使ったりして説明をする場合は、座って同じ目線にするよりも全体に向かった方が良い。体操の際には子どもが知っている曲を使う方が良いと思った。それは子どもがリズムにのりやすいからである。繰り返しのほうが動きは覚えやすい。教師がしっかり見本を見せることが大切だと感じた。言葉だけでは理解しにくいので具体的な見本が一番わかりやすい。「こっち、あっち。」ではわからないので具体的に「赤いコーンのところ」のような言葉掛けがわかりやすい。具体的でわかりやすい指示、説明はとても重要だと思った。(受講者A.Y.: 授業を受ける幼児の立場)

6 声掛けひとつで子どもの動きは変わり、誉めることで更に次の活動も意欲的になることがわかった。私はよく皆を誉めるようにした。そうすれば、その子どもをモデルにして他の子どものやる気を引き出せるかもしれない。実践前に練習をした時、ゲームの仕方がわかりやすいように説明できず苦労した。だらだらと長く説明せず、短く説明するようにした。これが良かったと思う。教師の説明の仕方の上手下手で子どもの意欲は変わるように思った。保育をすることで精一杯で後の子どもの方まで気がまわら

なかった。後ろの子どもがどのように動いていたのか自分はぜんぜん見ていなかったことに気づいた。「後の人にも聞こえていますか。」と一言声をかけるだけで子どもの気持ちは変わるだろう。自分もちゃんと見てもらえていると思うからである。全体を見渡せるような余裕が欲しいと思った。模擬授業のような実践をする機会がもっとあればいいと思う。前に出て指導することに慣れ、自分に自信をつけたいと思った。(受講者 S.K.: 授業を行う保育士の立場)

全員のレポートを考察した結果、受講者の感想や考えは、「授業設計力」に関するものと「授業実践力」に関するものに分けることができる。まず前者の保育計画力としては、「運動内容」「実践の流れ」「環境構成」「発問計画」「安全への配慮」の5項目に関することが多くあげられた。

(1) 運動内容

興味を惹きつけられるようなものであること、能力差が出ないこと、偏りが無く子供の身体を満遍なく発達させるものであること、個人運動と集団運動のバランスをとること、達成感・満足感を得られるものであること、子供の身体と精神の発育発達にに応じていること、季節感やストーリー性を感じさせるものであること等があげられた。

(2) 実践の流れ

強度の強い運動の後には弱いもの、立って行う活動のあとには座って行うものなどを組み合わせて、緩急に富みめりはりのある流れにすることがあげられた。

(3) 環境構成

安全への配慮を含め、子供の興味関心を引き出すような構成にすることがあげられた。

(4) 発問計画

子供の自主性や興味関心を引き出すような発問を準備することがあげられた。

(5) 安全への配慮

環境構成以外にも、実践の流れなどに気を付けることがあげられた。一方後者の保育実践力としては、「声掛けのテクニック」「臨機応変な対応」「安全への配慮・目配り」「子供達の様子の観察」「教師の態度」の5項目に関することが多くあげられた。

(1) 声掛けのテクニック

指示や説明に関する声掛けでは、手短にわかりやすく、明確に、ゆっくりと話すことが大切であることがあげられた。また、励ましや誉める言葉が大切であること、いけないことをした時には叱ることが大切であることがあげられた。

(2) 臨機応変な対応

子供相手の実践では、計画通りには進まないことがままあることがあげられた。

(3) 安全への配慮・目配り

全体を見渡すことがなかなか難しいことがあげられた。

(4) 子供達の様子の観察

子供の個人差に気を付け、一人一人を満遍なく見ることの重要性があげられた。

(5) 教師の態度

常に笑顔を決やさず、明るく誠実に対応し、親切で優しい雰囲気を作出し出すように努めることが大切であることがあげられた。

注

- (1) 日本教職員組合『教職評論』編集委員会『教育評論 通巻605号』pp. 24-25
- (2) 同上書p.35
- (3) 同上書p.40
- (4) 同上書p.36